〈特集記事〉

手話会話にみる我々が考えるべき倫理 「空間的連鎖構造」の提案に向けて

坊農 真弓
国立情報学研究所
bono@nii.ac.jp

1. はじめに

「倫理」ということばは、これまで言語学やコミュニケーション論をベースにしてきた私にとって、あまりなじみのないものである。私には、このことばに対し、何かとつきにくそうなイメージがあるが、それでいて誰もが考えなければならないような、放っておけない感覚がある。今回、本特集企画に寄稿させていただく機会をいただいたので、本稿では、私が現在進めている手話会話分析（坊農 2009）の土台となるいくつかの概念を紹介し、手話会話にみる我々が考えるべき倫理について思うところを述べたい。その中で、「倫理」ということばが持つ堅苦しいイメージだけでは想像できないような、我々の日常にある、「当たり前の倫理」について考えたい。

2. 会話の中の倫理

2.1. 空間的連鎖構造の提案：挙手して登壇して質問するルール

私が日本手話学会大会に初めて参加したとき、あることにとても驚いた。それは、学会発表の質疑応答の際、質問者がろう者であれ聴者であれ、挙手して質問する意思を明確にし、座長に指名された後、会場の正面に向かって小走りに急ぎ、登壇して質問の行為を達成するという「ルール」の存在である。

音声言語がコミュニケーション手段となっている大会では、このような光景は見られない。「挙手」、「座長に指名される」、「質問」といった順序だった行為は、音声的手段により素早く、また連鎖的に達成される¹。これらの行為の順序と他の行為を介入させない素早い連鎖性は、ある種当たり前のものとなって、音声言語コミュニティに存在している。それに対し、手話言語と音声言語の二言語を対等に扱う日本手話学会大会では、手話言語のやり取りの規範（視覚的に情報をやり取りする）を重視し、上述したようなルールを設定している。

当然のことながら手話会話では、他者の注意を引きつけてから発話を始めなければ、その発話は会話を構成するものにはなりえない（坊農 印刷中）。手話会話では、音声会話のように時間的に行為を連鎖させるだけではなく、空間上に散らばった他者の視線、すなわち視覚的注意を次に話し手となる人物に集結させてから、行為の連鎖を試みる必要があるのである。ここではそれを「空間的連鎖構造」と呼びたい。

2.2. 参与枠組みとフットィング：この質問をしている人物は誰なのか？

上述したような「質問したい者は登壇し、他者の視線を集めてから質問する」という空間的連鎖構造は、日本手話学会大会において参加者すべてが従うべきルールとして定められている。普段から音声言語コミュニティに慣れ親しんだ参加者は、このルールに従うべきことをしばしば忘れ、その場ですぐさま質問しようとしてしまう。このルール違反は、周囲に指摘され、登壇してから質問をやり直すこともある。

聴者の音声による質問は、結局その場の手話通訳者によって手話に翻訳されるのであるから、わざわざ前に出る必要はないのではないか、といった疑問が挙がることもあるかも

しれない。しかしながら、この場では、「この質問をしている人物は誰なのか?」といった発話の作者としての役割を他の参加者に示す必要がある。

社会学者のゴフマンは、自身が提案する『参与枠組み』という概念の中で、音声会話の中で話し手は様々な役割を担うと指摘し、その多様なフットィング (footing : 立ち位置) について議論している (Goffman 1981)。話し手が持つ役割は、口を動かして声を発し音を伝達するだけの「発声体 (animator)」、言葉を選択して実際に発話を作り上げ表現する「作者 (author)」、発せられた言葉に責任を持つ「本人 (principal)」の3つがあるとされる。音声会話のみならず、日本手話学会大会のような手話通訳を介した会話にも、この概念は適用できる。手話通訳者はここで言う「発声体」の役割を担い、質問をする人物は「作者」と「本人」という役割を担うと考えることができる。

2.3. 通訳という行為：同期的か非同期的か

手話と音声言語の間の通訳と、音声言語間の通訳の決定的な違いは、時間的に同時に通訳されるか否かである。手話の聞き取り通訳では、通訳者は音声発話をしている人物の傍らで同期的に手を動かす、いわゆる同時通訳の手法がとられる。それに対し、音声会話における通訳では、通訳者は音声発話をしている人物の発話が一旦区切られるのを待って非同期的に別言語に翻訳する、いわゆる逐次通訳の手法がとられることが多い。

日本手話学会等で見られる、手話から音声へ、音声から手話へといったメディアの異なる通訳場面では、しばしば、日頃触れている音声のメディアだけに注目してしまう聴者の参加者が現れる (例：音声母語話者なので、手話は見ずに通訳者の読み取り音声だけに耳を傾けるなど)。こういった聴者の参加者は、自分が日常的に接している音声会話の連鎖構造に関わることに慣れてしまい、そこに立ち現われている手話会話の空間的連鎖構造に気が付いていないのではないだろうか。

「発声体」としての通訳者が、線状的に紡ぎだす読み取り音声だけに耳を傾ける聴者は、実際にその発話を作り上げている「作者」としてのろう者、また発せられた言葉に責任を持つ「本人」としてのろう者と、一つの会話を創り上げているとは言えない。

2.4. お互いのインタラクションの組織的構造理解

2.1節から2.3節までにあげたこれらの問題を「倫理」の話に近づけて考えるならば、次の点に注意を向けなければならない。

ろう者は、通訳者の手話表現の羅列 (発話の著作権や責任が脱落した表現の連なり) のみを求めているわけではない。誰が質問しているのかという行為の著作権者を知り、その質問発話の責任者を知るとは、ろう者か聴者かを問わず、会話に参加するすべての人が、対等に持っている権利である。

ろう者にとって、通訳者の手話表現や表情を見ているだけでは、この知る権利は満たされない。「質問」という行為を遂行している聴者の表情や身体的な態度など、空間に散りばめられた様々な表現や情報を受け取るにより、ろう者は、会話に参加していることの臨場感や現実感を得ることができるのではないだろうか。

手話会話は「視覚的インタラクション」としての特徴を持つ。すなわち、視覚的に情報の授受がなされている。手話を日常のコミュニケーション手段とする会話参加者が会話場にいる場合、上述した空間的連鎖構造や手話会話における話し手のフットィングの特徴を配慮し、会話を組み立てていく必要がある。具体的には、日本手話学会大会での質疑応答場面では、ろう者に対し、通訳者の手話表現による言語情報 (命題情報) を見る時間と、質問している聴者の表情や身体といった視覚的情報 (命題に対する態度情報) を見る時間とを提供する必要がある。会場で聴者が着席したまま口ぐちに議論して、自分の表情や身体表現をろう者に見せないという行為は、結果として通訳者の言語情報しかろう者に伝わらず、情報として不完全なものを伝達することにつながる。またこれは、ろう者と聴者の間の合意形成がうまく行かない結果を招くかもしれない。

〈特集記事〉手話会話にみる我々が考えるべき倫理

日本手話学会大会には、多様な背景を持つ参加者（ろう者、難聴者、中途失聴者、聴者）が存在する。お互いのインタラクションの組織的構造を理解せず、自分が日常的に関わっているインタラクションの構造にだけ理解を示す態度は、倫理的なふるまいとは言えないであろう。これは、ろう者か聴者かを問わず、日本手話学会大会に参加するすべての人が今一度意識すべき問題である。

3. おわりに

以前、ろう者と聴者のカップルが、対面式のカウンターキッチンを好んで利用しているという事例を目にしたことがある（秋山・亀井 2004）。聴者同士のカップルであれば、非対面式のキッチンであろうと、発話を音声的に連鎖させ、会話の組織的構造を整えていくだろう。それに対し、このろう者と聴者のカップルは、ろう者が日常的に接している空間的連鎖構造を意識し、空間に散りばめられた多くの情報を統合的につないで、お互いの発話を理解し、会話を進めていこうとする。このカップルのやり取りを、質問者は登壇してから質問するという、質疑応答のやり方を「ルール」として定めている日本手話学会大会のやり取りと比べると、ろう者と聴者の間の「当たり前」のインタラクションの方法が、あまりにも自然に創り上げられていることに驚く。

聴者がろう者と話すとき、自分（聴者）の当たり前（従来会話分析で研究されてきた連鎖構造に基づく規範）を突き付けるのではなく、彼ら（ろう者）の当たり前（空間的連鎖構造に基づく規範）を理解しながら進めていく必要があるだろう。ろう者と聴者が分かり合うために、わざわざ「ルール」を定めなければならない日本手話学会大会は、まだまだお互いの協調的インタラクション環境を整えるための発展段階にあるのかもしれない。「ルール」ではなく、「当たり前」として協調的インタラクション環境を整えていくことが、手話コミュニティに対する「倫理」的なふるまいを意識することにつながるのではないだろうか。

本稿では、日本手話学会大会での事例を土台に、私が日頃進めている手話会話分析の基本概念を説明した。ここで提案を試みた「空間的連鎖構造」はまだ具体性に欠けた概念であるが、今後さまざまな手話会話を観察する中で、手話会話の組織的構造を理解するための理論構築をしていきたい。

謝辞

本小論執筆時、本特集記事オーガナイザーの亀井伸孝氏に多くのコメントをいただいた。亀井氏のお力無くしては、本特集は成立しなかった。この場を借りて深く感謝申し上げたい。本研究の一部は、独立行政法人科学技術振興機構平成21年度さきがけタイプ「情報環境と人」領域「インタラクション理解に基づく調和的情報保障環境の構築（代表者：坊農真弓）によって支援されている。

注

¹ 会話の連鎖についての学術的説明は、坊農・高梨編（2009）を参照されたい。

参考文献

- 秋山なみ・亀井伸孝（2004）.『手話でいこう：ろう者の言い分 聴者のホンネ』. 京都：ミネルヴァ書房.
- 坊農真弓（2009）.「手話会話分析をはじめるために」,『月刊言語』38（8）: 40-48.
- 坊農真弓（印刷中）.「手話会話における分裂：視覚的インタラクションと参与枠組み」. 木村大治・中村美知夫・高梨克也（編）『インタラクションの境界と接続』. 京都：昭和堂.
- 坊農真弓・高梨克也（編）（2009）.『知の科学：多人数インタラクションの分析手法』. 東京：オーム社.

坊農真弓

Goffman, Erving (1981). *Forms of talk*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

——2009年9月30日受稿、2009年10月4日受理——